



Step Forward >>>

ステップフォワード

留学経験ゼロから不断の努力で NYタイムズの「純ジャパ」記者に

「英語を使いたい」一心で独自のキャリアを築く

The New York Times 東京支局取材記者

上乃久子

上乃久子 (うえの・ひさこ)

岡山県倉敷市出身。1994年四国学院大学文学部英文学科卒業。同学科の事務職を務めた後上京し、バイリンガル雑誌社に勤務。その後、翻訳会社のビジネス翻訳コーディネーターとしてコカ・コーラなどの企業を担当。'99年にロサンゼルスタイムズ東京支局の求人広告に応募、200人の応募者の中から採用される。10年後、同局閉鎖を受け、国際協力機構 (JICA) の途上国からの研修事業を担当する傍ら、サイマル・アカデミー同時通訳科で学ぶ。2012年よりニューヨークタイムズ東京支局に取材記者として勤務。著書に『純ジャパニーズの迷わない英語勉強法』(小学館)がある。



>> 「純ジャバ」記者として英字ニュースを世界に発信

早朝6時半、起きてすぐテレビのニュースと同時にメールをチェック。緊急案件があれば、朝食もとらずに取材先へ直行することも。電車の中でメールに返信しながら各媒体の電子版ニュースに目を通し、その日何が起こりそうか、どんな展開に注目すべきかを頭にたたき込む。時には取材通訳のため、専門用語を一夜漬けて詰め込み、現場に向かうこともある。ニューヨークタイムズ東京支局取材記者・上乃久子の朝はこうして始まる。東京支局には特派員2名、日本人取材記者2名が常駐。上乃の仕事は、取材、同行通訳はもちろん、翻訳・サマリー作成を含む資料の準備、取材のアポ取りから飛行機・電車のチケットの手配、ホテルの予約、車の運転まで多岐にわたる黒子役。

「ホテルのコンシェルジュ、ツアーコンダクター、運転手を足して3倍にしたような感じです。取材に必要な、ありとあらゆることを日本人2人で処理するので、その三つが全部のしかかってくるような感じです」

支局や取材現場では、特派員から引切りなしに質問が飛んでくる。「今の発言はどういう意味か」「なぜ日本ではそうなのか」「どんな歴史的背景があるのか」——取材力や英語力、体力に加え、日本に関する知識も試される仕事だが、上乃は笑顔を絶やさず一つ一つ対応していく。海外で働いたことも留学経験もない自称「純ジャバ」記者の上乃は、不断の努力で培ったキャリアを武器に、今日も世界屈指のメディアに日本のニュースを発信する仕事の重要な一端を担い続ける。

>> 「英語力を伸ばしたい」一心で上京

岡山県倉敷市で生まれた上乃が英語に関心を持ったのは、中



ロサンゼルスタイムズの記者時代。東京支局で支局長と

学時代に見ていた深夜音楽番組「ベストヒットUSA」がきっかけだった。アメリカのヒットチャートを紹介するこの番組を通して、教科書にはない生きた英語に興味を持ち始める。高校時代、親にせがんで英会話教室に通いはじめ、ネイティブ講師と話して実際に言葉を使う楽しさを知った。それでも「バリバリのキャリアウーマンなど目指してなかった」上乃は、得意科目だけで受験ができ、瀬戸大橋を渡ってすぐという理由で四国学院大学に進学。外国人の先生が多く、実践的で厳しい授業が行われる環境で、国際コミュニケーションコースを専攻、聴く・話す英語を徹底して学んだ。

卒業後、同大学の研究室事務の助手として採用され、仕事で英語を使い3年を過ごすうち、都会で自分の力をもっと伸ばしたいという思いが強くなり、上京してバイリンガル誌編集部へ転職、さらに翻訳会社に移る。ビジネス翻訳のコーディネーターとしてコカ・コーラを担当し、プロのチェッカーやエディターの仕事ぶりを見習い、時には和訳も担当、さまざまな用語や表現を学んでいく。世界的大企業の最先端技術や環境レポート、分厚い技術解説書まで、言語を商品として加工する工程を目の当たりにする。一方で、話す力をもっと伸ばしたいと休日に通訳学校に通学。働きながら、実践英語の精度を上げていった。

>> ロサンゼルスタイムズで徹底的にしごかれる

そんな折、恩師より「ロサンゼルスタイムズの求人広告が出ている」と連絡があり、応募してみることに。採用試験は、面接日時確認のための電話に始まり、特派員が書いた質問項目を日本語に翻訳するテスト、実際に取材に同行して通訳するトライアルまで実に2カ月間続いた。「ダメ元」と思って受けた試験だったが、200人の応募者の中から最終的に上乃が選ばれた。

しかし喜びもつかの間だった。「自分はこんなことも知らないのか」と落ち込む毎日が続く。英語以前に政治や経済に関する知識の足りなさにごくぜんとした。野村證券の部長の取材に至っては、株式や長期金利の話についていけず失神しそうになり、支局長から「これができないとクビよ」とまで言われてしまう。切羽詰まった上乃は「できないなりにやるしかない」と一念発起、日本経済新聞を必死で読み始めた。それでも最初の2年間は「アナリストとの会話を一字一句間違わず翻訳しろ」「街頭インタビューを取れるまで帰ってくるな」と言われるたびに、なぜここまで、と泣きたい気持ちになった。

「同業他社の方に泣きついたら、『アメリカの会社はリトルリーグの選手を大リーグのスタメンで使うようなことをするけれど、慣れてくるし、その分鍛えられるから』と言われました。毎日追い詰められ、無我夢中だったけれど、あの頃が日本語でも英語でも一番よく勉強していたと思います」

しかし、海外メディアがこぞって撤退を始めた2000年代後半、ロサンゼルスタイムズも人員の縮小化が進む。1人また1人